

飼育レポート

待ちに待った 赤ちゃん誕生!!

飼育展示担当 堀籠 麻子

昨年6月26日、ユウタ(オス)と陸(メス)の間に待望のメスの赤ちゃん「ゆり」が生まれました。

レッサーパンダは産箱の中で母親のみが仔を外部から隠しながら育て、母親以外の臭いが見つかることを極端に嫌います。担当の私ですら姿を確認できず、産箱から聞こえる「ピー」という鳴き声を聞いて生存確認します。生まれたその日は鳴き声を聞く度にうれしくて。

しかし、喜びはつかの間。一気に不安が込み上げてきます。なぜか？陸お母さんは過去に2度の出産を経験していますが、どちらも育てていません。(今回も育てないかもしれない。)一度、放棄するとクセになるため、取り上げて人工哺育にするか、そのまま任せてみるかの決断を迫られました。通常であれば取り上げると思いますが、陸と長く付き合った私の勳で、陸に任せることにしました。授乳しなければ仔は生きられず、レッサーパンダの場合、その期間は1週間が目安だといわれています。毎日、鳴き声や給餌する時に陸の乳房をチェックするなどでき



31日齢(7月27日)



ゆり(左)と母親の陸(右)

ることはなんでもやりました。

不安で仕方なかった仔も今では大きく育ち、体重4kgを越えました。一人っ子のせいか育ち方がとても早いです。

1月からは陸お母さんと一緒だった寝室も別々になり、一人で寒そうに寝ています。外でもナナおばあちゃんと一緒にいる練習をしています。ナナは一人でのんびりしているのが好きのため「ゆり」が走り寄ると逃げてしまいます。それでも何回も練習すると遠かった距離が少しずつ近くなってきました。「ゆり」はナナに少し気を遣い、ナナも少しずつ「ゆり」が近づくことを許している。母親以外の個体に触れることで徐々に大人になっているのを見ていて微笑ましく思います。



友(左)とユウ(右)



3日齢(6月4日)

師と話し合って決めました。

現在は、11月末頃発情期の闘争に巻き込まれ怪我をして治療した仔ザル3頭をユウと同居させて4頭で暮らしています。友達になって日の当たる場所に向かい幸せになって欲しいと願いを込め、この3頭に陽向(オス)、友(メス)、幸(メス)と名付けました。最初は怖がっていた3頭も今はユウと一緒にエサを食べ仲良く暮らしています。

春の暖かくなる頃には、仲間と一緒に群れへ戻って欲しいと願っています。サル山内を元気に走り回るユウの姿を、そしてつかは母親になって子育てしている姿を見るのが楽しみです。

ニホンザルの ユウ

飼育展示担当 斎藤 勇

毎年春から夏頃にかけサル山では8~10頭位の仔ザルが生まれています。2013年は10頭生まれ、そのなかの1頭メスのユウは育児放棄でサル山内に放置され、人工哺育で育ちました。

人間に育てられたこの子は、他の仔ザルたちと違い群れのマナーや上下関係などを知らず、このまま大きくなってからサル山に戻しても生きていくのが難しいことから、他のサルに馴染ませ、しぐさを見て覚えさせるために生後5ヶ月位からお見合いをさせています。

このお見合いは、人工飼育のサルを群れに戻すことは全国的に成功率が低いこともあり、今できる事をしてあげようと獣医

フラミンゴ 繁殖への挑戦

飼育展示担当 櫻庭 美千代



親からフラミンゴミルクを
もらうヒナ



14日齢(9月21日)

今年はフラミンゴの再繁殖にチャレンジして8年目になります。2011年にヨーロッパフラミンゴ1羽、2012年にチリーフラミンゴ1羽が生まれました。

今年度は念願の2種類が生まれました。8月にヨーロッパフラミンゴ2羽、9月にチリーフラミンゴ1羽の全部で3羽が生まれ、順調に育っています。

昨年7月に1組のカップルがすり鉢を引っ繰り返したような土の山で産卵し抱き始めると、他のカップルたちは「なにになに？卵？産んだの？」と興味津々で覗きます。すると、まだ卵を産んでいない10羽近くのフラミンゴが巣を囲み、卵を抱いている親はとても迷惑そうにしていました。フラミンゴは1組が卵を産むと「私たちも!」と言うようにその隣、さらにその隣と連鎖して巣も卵も増えていきます。その数日後、予想通り隣に卵を産んだカップルがいました。3週間後には巣が5個並び、それぞれの卵を大事そうに2羽交代で温めています。順調に進むと30日ほどでヒナは生まれます。

ある日、一番端の巣で温めていたヨーロッパフラミンゴのカップルが、途中で巣から離れ、卵だけが残ってしまいました。その卵は順調にいけばヒナが孵る卵です。でも親がいなければ…と困っていると、無精卵(ヒナが孵らない卵)しか産まないチリーフラミンゴのカップルが卵を産んだばかりでした。このカップルなら借り親としてちゃんと育てるだろうと思ひ、預けることにしました。卵を預けて次の日、ヒナは無事に生まれました。種類は違いますが、隔たりなく本当の自分の子どもとして、しっかりと抱き、ミルクを飲ませていました。大事そうに見守るチリーフラミンゴのカップルを見たときには本当に安心しました。

今年は3組の親が子育てに奮闘しています。体はもう大人のように大きくても、ミルクが欲しくて、雪の中でも親を追いかけ回す子どももいます。2014年はもっとたくさんの親子が見られるように、繁殖の手助けを頑張りたいと思います。

動物病院から

初めての 吹き矢

獣医師 川本 朋代



アカカンガルーのモモタロウがカンガルー病にかかったのは10月のことでした。この病気は名前の通り、カンガルーに特有の病気で顔が腫れることが特徴です。早期に治療すれば予後が良いのですが、万一手遅れになると死に至る恐ろしい病気です。治すには抗生剤を毎日打つことが肝心です。

けれど相手は動物です。治すには注射を打たなきゃと言っても言うことをききません。しかも、メスや子どもなら捕まえて治療ができるのですが今回の相手はオスのモモタロウです。下手するとこ

っちがパンチやらキックやらでノックアウトされます。

そこで登場するのが吹き矢です。改造して吹き矢にした注射器に薬を入れ、それを打ち込むのです。その日から毎日吹き矢での治療が始まりました。

獣医1年目の私は吹き矢など当然打ったことありません。最初は先輩獣医が打っているのを横で見ているのですが、遂に吹き矢デビューの日がきました。

その日は胃の痛む思いでした。間違っても変な所にあたったら、他のカンガルーにあたったらと不安はつきません。ですが本番に強いタイプだと言いつつ、いざ出陣しました。

カンガルー舎に行くと、感づいたモモタロウはぴょんぴょんと動き回ります。けれど、じっとタイミングをうかがっていると動きがとまる瞬間がありました。すかさず吹き矢を打つと、見事モモタロウの腿にあたりました。

こうして吹き矢が功をなし、モモタロウの顔の腫れはなくなりました。今度は是非見に来てください。